京洛の風土に育まれて（01・10・20）

竹内直一（昭14・文甲）

はじめに

今日は私の一生を振り返ってお話しするというような設定になっておりますが、その理由というのは、私は京都という都会育ちですが、そういう者がどうして農林省の役人になったのかということ。二番目には、だいたい役人というのはあちこち天下りをするのですが、私は天下りをしないで消費者運動という道に行った、こういうことになったのはなぜでしょうか、ということ――そうしたことをお話ししたいと思っております。それが、私が生まれ育ったこの京都という環境――自然環境や社会環境あるいは教育環境――そういったものと密接な関係があるということを最近になって色々と思い返しまして、私のプライベートな面をお話しすることで、何かお役に立つことができればと思って、まかり出ました。よろしくお願いします。

小学校卒業まで

私の生家は京都御所のすぐ南でございます。夷川通りという道具屋の町で、家業は畳商でございます。「びんなお」という商号の畳商なんですけども、一代目は岐阜県の方から――これは侍だったようですけども――京都へ来て、禁裏の関係の――京都御所や公家屋敷などがありましたから――仕事を主にやるということで、あの地で商売を始めたようです。私で四代目ですが、私は商売とは無関係の役人になったものですから、家業は三代で終わっておるわけです。

私が生まれたのは大正七年。子どもがずいぶん大勢おりまして、育ったのが五人ですが、生まれたのは九人もおりまして、珍しいことに男の子は私一人で、あとは全部女の子なんですね。ですから女性の心理にはわりあい詳しくなりました。そういうなかで私が小さいときから少し変わった生活を送っておりました。次々に子どもが生まれるものですから、私はときどき母親の実家の方――これは東山の知恩院の門の前にあったのですけども――そこのおばあさんに預けられることがしばしばございました。それから――あの当時、三歳から幼稚園に行くなんていうことは滅多にないのですが――どうも保育所代わりに、三歳の頃から幼稚園にやらされました。行きました幼稚園は、同志社の系統の京都教会の付

属幼稚園で、私の実家のすぐ南にありました。

そういう環境で幼児の頃は過ごしたわけですけれども、そこで申し上げたいことは、私は大正七年の八月二十一日生まれなんです。二十一日というのは弘法さんの日ですね。したがいまして私の母親は、弘法さん参りを毎月、私を連れて行って、弘法さんへお参りをさせられました。そういうことと、母親の実家へ預けられたのは知恩院の門の前ですが、おばあさんが毎朝、清水寺へ朝参りに行ったんですね。朝六時頃、暗いうちから起きて、清水寺へ参らされました。そしてお寺で聴いたお話が――私の運命を決定づけたと言ってはオーバーですけども――大西良慶さんがもういたと思うんですが、地獄の話をするんですね。そして、嘘をつくと閻魔さんに舌を抜かれるというわけで、三歳や四歳の頃の子どもにとっては大変な恐ろしいお話を聴いた。それから地獄の絵なんかも見て、すごいショックを受けるわけなんですね。そういうことから、子どものうちから、嘘をつくと大変なことになるぞ、という強いインパクトを与えられました。それが一つと、それから幼稚園の方もキリスト教ですから、もう毎日お祈りですね。そういう雰囲気で、小学校へ上がるまでは、今からすれば特殊な雰囲気に育ったのかと思いますけども、そういう幼児体験が、案外、私を決定づけたものではないのかと、振り返って思っております。そのなかで、これから私が学生時代を通じて一貫して申し上げたいことは、この幼稚園の先生は絶対に子

どもを叱るということはしませんでした。キリスト教のせいかどうかはわかりませんけれども、私はずいぶん乱暴なことをやっていたのですし、それから三歳ですから、ときどきお漏らしもします。そういうときも絶対に先生は怒りませんでした。そういうことで、怒られるということは、幼児の頃からほとんど経験がないのです。

それから、小学校へ上がるまでの間は、私は近所の子どもたちと毎日のように――昔のことですから――道で遊ぶわけですけども、十五、六人が毎日、日課のようにして道で遊ぶ。そのなかで高等小学校の少年が番長のようなもので、私は一番の年少者ですから、お小姓役を仰せつかって色々と用足しをする、というような関係で、小さい頃から、そういう近所の年上の子どもたちともずいぶん付き合って、御所で蟬採りをやったり蜻蛉釣りをやったり、というようなことをほとんど毎日やっておるというような経験があります。

以上のようなことをまず申し上げまして、いよいよ小学校に入るのですけれども、小学校は私の実家のすぐ北側に隣り合わせにありました。調べますと、昔の九州の小倉藩の藩邸の跡のようですね。富有小学校というところです。そこへ六年間、通ったわけですけれども、年少の一、二年の頃はもう遊んでばかりです。小学校の頃から、スポーツといっては、野球をやりました。それから体操なんかもやっておりましたけれども、それから、植物園の連合運動会では、リレーメンバーで走ったという記憶もございます。

小学校の頃で私がいちばん記憶に残っていることは、確か三年生、四年生の担当をしてくれました藤原という先生が、教科書を教えること以外に、副読本をときどき車座になって読んで聞かせてくれまして、これが私の読書欲を非常にかきたててくれました。今でもいちばん覚えているのは、あの杜子春という短篇です。あれを教室で読んで聞かされて大変なショックを受けました。それに触発をされたわけですけれども、私は小学校三、四年の頃、毎日のように本を読みあさりました。当時、全集ものが流行して、小学生全集なんていうものも出ましたから、それを買ってもらってずいぶん読みました。小学生のくせに夜遅くまで読むものですから、朝寝坊をして学校に遅刻をすることもしばしばございました。というようなわけで、私の読書熱が、この小学校の三、四年の担当の先生のお蔭で培われた、と同時に、この先生は作文をずいぶん書かせました——生活綴り方というのですか——それで、私は小学生ですけれども、四百字の原稿用紙を十枚くらいを平気で書くような習慣がつきました。これは先生のお蔭だろうと思います。ずいぶん当時の、今でいう推理小説、探偵小説も、大人が読むような小説なんかも読んだし、講談本も読みました。ずいぶん無茶苦茶にこの頃に本に親しんだ記憶がございます。

と同時に私は小さい頃から、花をつくったり、小鳥を飼ったり犬を飼ったり兎を飼ったり鶏を飼ったり金魚を飼ったりと、ずいぶん動物に親しんだ生活を送った記憶がございま

す。私が今でも覚えておるのは、幼少の頃に、そら豆を庭に播いて、それから芽が出ますと、これに大変なショックを受けるわけですね。どうしてこんなものが、芽が出てきて育つのだろうか、と。そういうことから、こういう、自然に親しむというような気持ちが出てきたのではないだろうかと思っております。

小学校の五、六年になりますと、今度は——その頃でも——受験勉強というものがあったんですね。担任の先生が毎日のようにガリ版で宿題を出したり、あるいは授業が終わると補修をやったり、ということで、ずいぶん努力をしてくれました。お蔭様で私は府立一中へ入ることができたわけですけれども。

京都一中から三高へ

中学では、私は読書ということからは無縁の存在でした——どういうわけだかわかりませんけれども。一年の頃から三年までは柔道部に入って、柔道部がいやになって、というのは夏の間に柔道着に青カビが生えるのですね、もう臭くて臭くて、こんなのはいやだと思ったときに、陸上競技部から誘いがありまして、そんな臭い柔道着を着るよりも表に出た方がいいぞというわけで、今度は陸上競技部へ入って、投擲の方、円盤とか槍とかそういう方をやることになりました。中学時代はろくな記録も残すことができず、草木のよう

な存在であったわけです。そのかわりに、昼休みにラグビーに没頭した記憶もございます。

ここで申し上げたいことは、さきほど動植物が好きだということを申し上げましたけれども、中学校では一、二年の頃に博物同好会というのに入りまして、比叡山だとか北山の方に植物採集、昆虫採集、そういったことをやったり致しましたし、冬になると比叡山や花背、愛宕山なんかのスキー場へ通ったという記憶もございます。

中学時代はどうということはなかったのですが、ようやく戦時色が濃くなろうとする中学時代に、私の印象に非常に残っているのは、連合運動会がある時に、朝礼の時にですね、配属将校が、これから運動会に行く時にはゲートルを巻いて行くように、という通達をしたのですね。そうしたらば、当時の校長――山本安之助という偉い人格者ですけども――この方がすぐに前に出てきて、『今の配属将校の言った「ゲートルを巻く」ということは取り消します。成長盛りの子どもがそういう窮屈な格好をして行くのはいけないのだ』というすごいことを言って、配属将校――少佐ですけども――の面子まるつぶれ、といったこともありまして、私はその時、この校長さんは偉い人だと心から尊敬した記憶があります。

中学時代はあまりお話しすることはないのですけれども、一つだけ、私の進路に関係することを。これは、私の父親が江田島を見学致しまして、帰ってきて、『江田島の兵学校

の生徒の格好は大変に格好いい』と言うわけですね。『お前もああいう勇ましい格好に憧れたらどうだ』と余計なことを言ったものですから、私はその気になって、海軍兵学校の試験を受けてみようというような、とんでもない考えを起こして、事実、大阪の女学校の試験場へ受けに行ったこともございます。試験は、一日ごとに合格不合格を決めるという面白い制度で、それで一日目は――何の科目だったかもう忘れましたけれども――幸いに合格しまして、二日目にまた受験に行きましょうと思った朝、私の母親がぽろっと涙を流したのですね。何にも言わないで涙を流すので、京阪電車に乗りながら、なぜ母親が涙を流したのだろうと考えたところが、どうも、私がこういう学校へ行くと、必ず戦争の時には死んでしまうのではないか、ということを悲しんでいるに違いないと思いまして、私は二日目の試験は黙って捨てたのですね。そして帰ってきて、母親には『今日は不合格になった』と言って、それっきり海軍兵学校は忘れてしまう、というようなこともございました。私の母親は一言も、そういうところへ行ったら危ないから止めとけとか――あの頃の世の中でそういうようなことを言うのはいけなかったのかもしれませんけれども――言いませんでした。一粒の涙で私の命が助かったというとオーバーですけれども、私は兵学校に行っておればとっくに命は無くなっていると思いますけれども、そういうこともございました。

いよいよ三高時代に入るのですけれども、三高時代といえば、もう陸上部――さきほどもお話がありましたけれども。私は最初はあんまり気が進まなかったのです。三高へ入ったら勉強しようかな、と思っていたところが、しつこく勧誘を受けまして、やむを得ず入ったというような不心得な部員でありました。二年生頃までは、何となく練習をしたり合宿をしたりということをしておりましたけれども、三年生になって、どうつむじが曲がったのか、私は陸上部をやめてやろうという不届きな考えを起こしまして――あの時の主将は植村健（昭14理乙）君でしたけれども――植村君を大変に苦しめた記憶がございます。私のところへやって来て、えらく熱心に引き留める努力をしてくれましたけれども、私も頑固でした。自分の気に合わない部生活はやらない、と。というのは、ごく一部の先輩の意見ですけれども、一高三高戦に、一年生の時に大敗をしたわけですけれども、その時に監督が言うのには、『とにかく部生活というのは、一高戦に勝たないと何の値打ちもないんだ』と。それが全てだ、というような言い方をされたものだから、私らは反撥をしたわけですね。なぜ我々の人生が部生活のために、一高戦に勝つためにあるのだ、と、あの年代にありがちなことを考えまして、そういう目的の部生活では納得いかない、というわけでだだをこねたわけです。けれども植村君に説得されて、『それでは、合宿もしないし、皆と一緒に練習もやらない、自分の個人的練習だけはやらせてもらいます』というような

――主将としては大変困ったのだろうと思いますが――統制を乱すようなことを平気でやりました。

しかし――さきほどもちょっとお話がありましたけれども――三年生の時の一高戦では、今までの個人記録を全て更新する新しい記録を、砲丸投げや円盤投げ、槍投げでつくって、実質的に一高に勝つということにある程度の貢献ができたわけですし、そのあとのインターハイでも、槍投げと円盤投げで私の個人的な新記録を出して、得点を得ることができたわけです。

ここでスポーツということに私の経験から申し上げますと、日本のスポーツ界というのは、試合の前になっても盛んに何か練習をやりますね――あれは気を紛らせるためにやるのかどうか知りませんけれども――私自身の経験から言うと、試合の前、四、五日は何もしないでいる方がいいのではないか。私が一高戦の時に砲丸投げのサークルに立って、自分の体がゴムのように弾力性のあることに気づきました。ですから、日本のスポーツ界のトレーニングのやり方が間違っているのではないか、と。これは私の経験から思うのであって、科学的な根拠があるかどうかは存じませんが。というようなわけで、最後には陸上部のためには貢献はできたわけで、今までのわがままを償うことができてほっとした、という記憶がございます。部員の皆様には大変に御迷惑をおかけして、今でも申し訳ないこ

とをしたと思っておるわけです。

ここで私が体得した、というと悪いですけれども、特に陸上競技というのはフェアプレーということを一番大切にするわけですね。トリックを使うわけでもないし、自分の実力を発揮するということに専念をするということですから、こういうフェアプレーの精神を、三高の陸上部生活を通じて実践的に体得することができた、というのは私の人生に大きなプラスであったと思うわけです。

ここでまた一言、両親のことを申し上げて恐縮ですけれども、あの当時、部のことについてずいぶん議論をしたことがありまして、陸上部のボックスで遅くまで同僚と議論をして自宅へ帰ったわけです。午前二時頃になったと思います。そうしますと、私の両親が正座をして二人並んで座っているのですね。帰って、どんなに雷が落ちるかと思ったのですけれども、何も言わないで、『遅くなるなら一言、電話を入れろ』と、その一言だけで私を寝かせてくれました。これにも、大きなショックを受けましたですね。ですから私は、最近の世の中の風潮——何でもガミガミやる、先生もガミガミどやしつけるというような風潮——あれは逆効果ではないかと、私の経験からすると思っております。黙って両親が正座して一言だけ『電話入れろ』と言っただけ、これほどきついあれはございませんですね。

こういうようなわけで三高時代には非常に、勉強の方でも、深瀬基寛教授のおかげで私は英語が好きになりましたし、鈴木成高教授のおかげで西洋史、特にフランス革命のくだりなんかは今でも覚えておりますけれども、ああいう良い先生のお蔭で、私の人格形成に大いに役立つことができたと思って、感謝している次第です。

大学時代から戦争体験

それでは次は大学時代に入りますけれども、ワタシは京都の出身ですけれども敢えて東京大学へ入ったのですが、このとき両親は何にも私に制約を加えることはしませんでした。おまえの好きなところへ入って、おまえの好きな職業に就けばいい、と。不充分ではあるけれども学費は面倒みてやるから、好きなようにしろということで、全部、私に一任なのです。ということは逆に私にとっては責任重大になるわけです。

そういうことで、初めて東京で一人住まいの下宿生活をしたのですけれども、大学へ入って私は、大学というのは大いに学ぶところだ、ということで、これに徹底しようと思って、禁酒禁煙を守りました。そして――少しエキセントリックであるかとも思いますが――私の大学生活三年間、銀座へは一歩も足を踏み入れるっていうことはありませんでした――ちょっと偏屈なんですね。こういうような生活で、本当に修道院に入ったような気

持ちで学生生活を送りました。講義は、自分の好きな先生の講義だけを聴いて、あとは大学の図書館を占領して、朝から晩までそこで勉強するということに終始致しました。

このお蔭で無事、高等文官試験を受かりまして、いよいよ就職ということなのですけれども、私は農林省一本に絞って就職し、掛け持ちは一切しませんでした。その理由は、といいますと、本郷の古本屋で見つけました『農村青年報告』という――これは信濃毎日新聞社が連載した長野県の若い農村の男女の人の随筆集ですね――それを読みますと、とにかく、女性が子どもを産んで三日目にもう畑で働かされるとか、ずいぶん人権無視のひどいことが書かれているわけです。そういうのを見まして、当時はまだ地主・小作人の関係というのがありましたから、私は、こういう社会的な不公正を何とかしなくちゃあ日本の国は良くならないのではないか、というわけで、自分は小作問題に没頭しよう、一生を捧げようというような気持ちになって、以後、農業関係の本をずいぶん読みあさることになります。そういうわけで、高等文官試験に通りましたけれども、農林省一本に絞って就職したわけです。

ここでも、その過程で一時、浮気を――浮気といってはなんですが――、当時、右翼の大物のある人が蒙古の自治政府というものをつくりまして、それの宣伝に大学へやって来たのですね、そして、これからはジンギスカンと同じ、日本人が世界を制覇するんだ、蒙

古を拠点にして全世界を支配するのだ、というような大風呂敷を広げて我々を扇動してですね、それにまた私が引っ掛かったのです。一時は本気で蒙古へ行こうという気持ちになりました。ところが偶然にも、これは陸上部の大先輩の西田狷之助先輩（昭九文甲）がですね、たまたまこの蒙古の連合自治政府に就職していて、一時、休暇で帰って来ておったのですね。それで京都大学の医学部の芝生で、先輩の意見を聞きました。ところが先輩は、おまえの気持ちはわかるけれども、やめとけ、と。理由は、といいますと、とにかくろくな奴が来ていない、悪い奴がはびこっているから、血気にはやってそんなところへ行けば、おまえは命を落とすに決まってんだから、やめとけ、と言われました。私はあっさりと、私の尊敬する先輩が忠告してくれるのだから、これはやめました。そしてもと通り農林省に、というふうに決めたわけですけれども、西田先輩はそういうふうに我々後輩を説得しながら、ご自分は蒙古の地で亡くなられましたですね。大変に立派な先輩を若くして亡くして、非常に私は残念に思っておるわけです。

そういうようなわけで、私は農林省に入ったのが太平洋戦争が始まった直後です。戦争が始まりましたから、すぐに、役所は一週間で辞めて、私は海軍に行きました。海軍では、大学を出た者のなかからすぐに主計中尉にしてやる、という非常に好条件で募集したものですから、私はそれに引っ掛かって行ったわけです。そして三箇月の訓練の後、もう戦争

が始まって南方の方を占領しておりましたから、どこかへ赴任しなくちゃいけない訳です、と。海軍というのはわりあい親切で、志望を募りましたですね。希望のところはどこだ、と。私は支那か仏印か南方の陸上勤務を希望する、と。理由は、農林省で食糧問題をやりたいと思っているのだから、陸上勤務で食糧のことをやりたい、と。海軍には軍需部というのがありまして、食糧や着る物やなんかの補給をする役所があるのですけども、そこに赴任をさせてくれました。

赴任の途中、軽巡洋艦でジャワのスラバヤまで行くのですけれども、その途中ですね、出口の豊後水道で、アメリカの潜水艦からの水雷で、私が乗っておる軍艦に穴が開きそうになったのですけれども、見張りの人の機転で、すんでのところで命を長らえました。フィリピンあたりで、ミッドウェー海戦に負けたという情報が入りました。一般の人は、あれは勝ったといってやってましたけれども、我々には正直に教えてくれました。ああこれでもう日本は駄目かなと思って、戦地へ赴任した記憶がございます。

私が約二年間勤めましたのは、インドネシアのセレベス島のマカッサルという港ですね。そこの軍需部というところで、糧食の補給の役目を仰せつかって約二年半やりました。初めのうちは平和なところだったのですけれども、オーストラリアから爆撃機が毎晩来るようになりまして、ひどい目に遭いました。港ですから、集中的に爆弾や焼夷弾を落とすも

のですから、毎日のように倉庫が燃えるのですね。夜中に消火活動をやって、昼間は後片づけ。そして死人が出ますから、死人の葬式を我々主計課の者がやらなくてはいけないわけです。そういうことで、ほとんど二箇月の間は、ほとんど睡眠できないような状態が続きまして、とうとう熱帯の病気に罹りましたですね。

そういうような目に遭いまして、私は現地で、率直に申せば、戦争というのは酷いものだということを身をもって体験をしたわけなのですけれども、そこで、最初の間はですね、この戦争がもし勝ったとしたならば、おそらく軍部がその権力を握ってひどいことになるのではないか、私は――初期の頃は――この戦争に勝ったら困ったことになるな、というような気持ちで勤務していた記憶がございます。終わり方はもうめちゃくちゃにやられて、私は命からがら内地へ送られてきたわけですけれども、こういうような実戦の体験を一度でも持ったならばですね、私はやっぱり、戦争というのは良くないという、これは理屈抜きで、そういう気持ちを今でも持っておるわけです。

そこで、政治をやる人がですね、そういう実戦の体験もない人が勇ましいことを言ってどうのこうのと言うのは如何なものかと、私は一市民として、現在でも密かに思っておるわけでございます。そのなかで、職業軍人のいろんな実態――具体的には申しませんけれども――一般に公表できないようないろんなことを私は目にして、ああこれでは負けるの

は当たり前だな、という感じを持ったことは事実でございます。

終戦を迎えましたのは、私は横須賀の軍需部というところでございます。そして戦後、建長寺にですね、仮の事務所を開いて、そこで、今までの出入りの業者の支払いをですね、その事務を、一月半ぐらいやらされましたですね。それが後の日本のインフレのもとになった、私もその日本のインフレに加担をした一員であったと思って、今でも恥ずかしく思っておるのですけれども、これは役目柄やむを得ないかもしれませんが。

役人生活

そういうことで一〇月に復員して、ようやくそれから農林省の勤めに入るわけです。いろいろあちこちに参りましたけれども、そのなかで思いつくことを一、二、申し上げますと、戦後、物価庁という役所ができましたですね。で、公定価格をつくる作業をやらされました。この時はまだ占領時代ですから、いろいろ公定価格の案をつくると、GHQへサインを貰いに行かなくてはいけないわけです。いろいろ計算のやり方があって、持って行くのですけれども、当時の司令部の職員には、初期の頃はですね、非常に優秀な職員がおりましたですね。そして、二言目に言われることは、おまえたちはタックスペイヤー——納税者、一般の国民ですね——のことを念頭においてこういう数字を持ってきたのか、と、

繰り返し言われましたですね。我々、日本人として、公務員として、タックスペイヤーのことを念頭におきながら仕事をするなどということは、いまだかつてなかったわけです。この時はずいぶんルトカルチャーショックを受けましたですね。はあ、タックスペイヤーのことを考えて仕事をするのが役人の仕事なのか、と。当然のことながら、そういうことに気がついていなかった自分を非常に恥ずかしく思いました。しかし、こういう優秀な職員というのは、アメリカが占領政策を転換すると同時に、みんな更迭されて、いなくなりましたですね。

それから、話を転じまして、私は官房の総務課というところで国会係をやらされました。これは今でもやっておりますけれども、議員さんの国会質問の要旨を取ってくる役割ですね。廊下とんびをしまして、今度はどういう内容の質問をなさるのですか、と。そういうことを、質問を取ってきて、答弁書の原稿を書いて、そして大臣なり局長なりに渡して読んでもらうという役割のなかで、いろいろ、議員さんの実態、良い議員さんもおれば良からぬ議員さんもおりましたが、そういう、普通、役人だけをしていたのではわからないような国会議員の実態というものに触れることができて、大変に勉強になったと思います。

そのなかで私は、行政・役所と政治との関わりというものですね、今でも新聞なりに出ますけれども、役人のスキャンダルだとか、政治家と役人とがつるんだスキャンダルとか、

そういったものがよく報道されるわけですけれども、私が、現実にこの目で見てショックを受けたのは、これは名前はあえて言いませんが、農林省の大臣ですけれども、そこの私邸へ朝行きまして座っておりますと、代議士さんがやって来て、そうするとボスの大臣が札束を新聞紙にくるんでサッと渡すのです。そういうことが現実に目の前で行われるのを見まして、ものすごいショックを受けた記憶がございます。

こういうようにして、政治の裏を垣間見ることによってようやく、日本の政治・行政の実態の一端を理解するきっかけができたと思っております。私が、これもごく短期間ですけれども、農林大臣の秘書官を仰せつかって——これは田子一民という、衆議院議長もやった立派な方ですが——この方の——「ばかやろう解散」の時の大臣ですけれども——この方の秘書官をやって、田子一民という人はずいぶん清廉潔白な人であるということを知りました。大臣に就任すると、各業界からみんなお祝いの金を持って来るわけですね、私は玄関番ですから、そうすると大臣は、そういうのは一切、お金は党の方へ持って行け、一切受け取るな、取り次ぐな、というようなことでありました。以前、新聞にくるんで札束を渡すような大臣もおれば、月とスッポンほどの違いがるのかな、と、こういう感じを持った記憶がございます。こういう立派な方はあまり長生きをしないですね。

次いで、私は人事院というところへ出向いたしまして、ここでまたカルチャーショック

を受けるわけです。と言いますのは、人事院というのは公務員の身分制度をやるところなのですけれども、公務員のあり方として私が非常な刺激を受けましたのは、現在は知りませんけれども、当時のイギリスの公務員といのうは、あそこは満六〇歳が定年だそうですね、満六〇歳の定年まで公務に専念をして、定年を迎えたならば夫婦して田舎へ引っ込んで、天下りだとか、あるいは企業に就職するとか、そういうことは一切しないのだそうですね。こういうのが本来の公務員ではないのか、と私はそのとき大変に感銘を受けた記憶がございます。現在のイギリスの公務員はどうだか存じませんけれども、一九五〇年くらいまでのイギリスでは、そういうことであったようです。日本ではそれに引き替えて、役人が終われば必ずキャリアーのほうは天下りをやる、あるいは議員に立候補して出世していく、と、こういうようなことが慣例になっているわけですけれども、こういったことでは、日本の行政というのはうまくいかないということが、もうこれははっきりしているのではないかな、と思っておるわけです。

一応、形のうえでは公務員法という法律があって、立派なことが書いてあるのですけれども——これは占領時代に作られたものなのですけれども——現実は一切みんな骨抜きになって、形骸化しているのが実情ですね。つい先だっても、郵政の有力な役人が参議院で高位当選をしたことが報じられましたけれども、ああいうことが無くならないのは何故か

ということは、我々有権者としては深刻に考えなくてはいけないのではないかと思っております。

それから今、小泉内閣が、公団・公社、ああいったものの整理ということを政策の柱として打ち出しておりますけれども、私も実は、愛知用水公団というのが出来た時に、その職員に出向して勤務した記憶がございますけれども、あの公団の制度が出来た当初の建前は非常に良かったのです。役人のいいところと民間人のいいところを付き混ぜた制度が公団・公社だ、と、こう言うのですね。事実、愛知用水公団が出来た当初は、民間から立派な技術者やなんかが来まして、なかなか実力のある人が活躍していた記憶があるのですけれども。

その後は、もうだいたい役人の天下りの専門機関のようになってしまっておって、あの公団の経営というのは——理事者には元局長とか次官とかいう人がおるわけですけれども——経営の実体を握っているのは、本省の役所の課長ないし課長補佐クラスで公団の理事者というのは何の経営の責任も負わないし実権も持っていないというのが実情なのです。ああいうものが何十もあって莫大な経費が使われておるというのは、これをもう無くせという世論が起こるのは当然のことではないか、と、私の体験からそれは言えると思います。

そして私は農林省の勤務では、最後には大臣官房の経理課長というのを仰せつかって、

農林省の金庫番のようなものをやらされたわけですけれども、ここでもまたいろんな裏の醜悪な面を見せつけられて、がっくりきた記憶がございます。というのは、先ほどもお話しした選挙運動ですね。役人が現職中に選挙運動をやるわけなのですけれども、私は経理課長ですから、役所の官舎の電話の管理もやるのですね――だから役所が払っているのです、官舎の電話は――、そして、ある人の電話料がずいぶんかさむので調べたところが、毎日毎日、官舎から、選挙運動の電話を全国各地にかけるのですね。莫大なもの、途方もない金額が出てくる。それはみんな選挙運動なのです。これには恐れ入りましたですね。なんか連絡だといって嘘を言うのですけれども、実は選挙運動です。

そしてああいうのはですね、地方の出先の役所の責任者にノルマを掛けて、何票を確保せよと言いつける。ノルマが達成できない場合は、気の弱い人たちは自殺するということもございました。だから役人が議員になるというのは、もう非常に良くないことだ、と私は痛切に思っております。あれは法律で禁止すべきではないかと思っております。

経済企画庁へ出向

私は次は、一九六五年には経済企画庁へ出向を命ぜられました。この時は、ようやく消費者行政というものがクローズアップされまして、経済企画庁に国民生活局というのが出

来ました。この時の経企庁の長官は藤山愛一郎さんで、この人の民間人らしいアイデアでこういうものができたわけです。その時の局長として――これは農林省の時の私の同期ですが――高等学校では先輩ですね――中西一郎氏（昭11文甲）――後の参議院議員――この中西が国民生活局長になって、私がその補佐役の参事官ということで、農林省から出向しまして、ほぼ二年間いろんなことをやったのですが。

そのなかで私が大変に目を開かれたのは、経済計画をつくるという作業ですね。このなかでいろんな経済学者とお付き合いがすることができました。中山伊知郎、それから都留重人、宮崎義一、伊藤光晴といったような良心的な学者とご一緒になって作業をするという、非常に有難い経験を積むことができまして、私自身がマクロな経済に目を開くきっかけを作って頂いた。この人たちは恩人ですね。

そういうような環境のなかで経済企画庁を約二年間、勤めさせて頂いたのですけれども、後半は、私は国民生活局の人間として、これは役人としてはあんまりいいことだとは思われないのですけれども、野党の国会議員に質問状のメモを渡してですね、政府に質問させるというような――これは公務員法違反になるのかどうか知りませんけれども――それをやって、私たちが密かにこうやりたいと思うようなことを少しでも実現させてやろう、という良からぬことを考えていい気になっていた、という――これはあまり大っぴらに大き

な声で言ってはいけないことかもしれませんが――やった記憶がございます。お蔭でですね、いろいろな成果を上げましたけれども、これは省略させて頂きます。

そういうことをやったお蔭で、結局、私は首を斬られることになるのですが、そのきっかけは、牛乳の値上げ事件というのがございまして、これは、当時は農林省の畜産局長が全国の知事に通達を出して、来月から牛乳一本二円値上げをしろとか、一円値上げをしろとか、そういう通達を出すと、全国の小売屋さんが同じ期日に同じ値段、値上げをして消費者に売る、ということが慣例になっておりました。これについて、実は、小売屋さんの人たちが私どものところへやって来て、こういう怪しからんことをやっているので、経済企画庁は消費者保護の立場から、是非これはやっつけてくれ、と、こう言うものですから、これは怪しからんというわけで、今度は、国会の物価特別委員会というのがございましたから、そこで農林大臣を呼んでとっちめる役割をして、その質問状を書いたのが実は私だ、というようなことで、非常に良からぬことをやる、と、そういうことが親元の農林省へ知れることになって、あいつは怪しからんやつだ、あいつは農林省の業界を酷い目にあわせるようなことをやる。農林省の役人の風上にも置けないというわけで、私は、首を斬られる羽目になるわけです。

なぜそんなことをやるかといいますと、私はどうせ、政治家に胡麻すって議員に立候補

して、というようなことも考えていないし、それから民間に天下りをして、というようなことも考えていないし、どうせ農林省ではつまはじきにされているのだろうと思っておりましたから、今度は、経企庁へ行って初めて、消費者運動というものはどういうものかということを、少しばかり齧ることができました。そのなかで、消費者運動というもののやり方というものが、私はよくわからなかったのです。運動というのはだいたい——労働組合運動がそうであるように——数を頼んで圧力をかけて目的を達するというのが、それまでの日本の運動の基本的なあり方だったのですけれども。

当時ですね、ニューズ・ウィークのある号に、アメリカのラルフ・ネーダーという——この当時はまだ三十歳代の運動家がですね——これは弁護士です——運動家の運動の実績の紹介がありました。この人は、数人の同志と一緒になって国会のロビー活動をやったのですね。例えば牛肉の衛生状態が悪い、あるいは自動車の安全性が良くないというような場合に、それを直させるような法案づくりを——彼らは専門家ですから——やって、そして議会で通させるというような、そういう議会でのロビー活動をやって消費者保護のための実績を稼ぐというような、そういう運動が始まったのですね。それがニューズ・ウィークの紹介するところとなりまして。

それを私が見て、これならいけるかもしれない、という気持ちになりました。だから、

大勢の労働組合のような、多数を頼んでというようなやり方ではなくて、少数の人間が結束すればできる、ということで私は、もう役人の道をやめてこれで行こう、という決心をして、その手始めに、牛乳の今の値上げ反対運動をやったわけです。ところが農林省は目の敵にして私の首を斬ったのですが、しかし、その時に、あの竹内が扇動したというようなことを言われましたけれども、事実、全国の、それまで運動ということに関わりのなかった団地住まいの奥さんたちなんかがですね、牛乳の一円値下げ運動をやりました。一円値下げを要求する代わりに、今まで牛乳屋が四階の上まであがって配達していたのを、一階に箱を置いて済ませる、と、そうようなことを条件で一円安く買いましょうというような、本来のいわゆる草の根運動というのが初めてそこで広がったわけです。それで私は、これなら行けるというわけで、もう役人の首を斬られても構わないという安心感でやったのです。案の定、乳業メーカーからクレームがついて、おまえは首だと言われました。運の悪いことに、その乳業メーカーの副社長に元農林次官が天下りをしていたものですから、もう、どうしようもない。辞めろと言われて、私は辞めますということで、退官ということです。

消費者運動

そのあとはどうしたらいいのか、ということですけれども、これは全く目鼻が何にもついていないところを、徒手空拳で、金の目当てもないところで消費者運動を立ち上げよう、という、無手勝流ですね。そこで、今までの消費者運動の欠点を直していこう、と。とにかくまず、お金の面ではいっさい役所のお世話にはならない、と。あるいは業界からの寄付なんかもしない、と。あるいは機関紙を出して会社の広告をとって広告料でまかなうとか、そういうことは一切やらない。独立独歩でやろうということですね。それから、労働組合のように特定の政党とつながって政党の遣い走りになるような、そういう組織になっては、これは思った通りのことはできない、というわけで、政党支配からも脱却しようというわけです。それから、今までの消費者運動というと御婦人の運動であったわけですね。そういうことではうまくない、と。消費者の半数は男性なのだから、男性も平等に参加できるような運動にしようではないか、というような考えを織り込んで、一つの独立独歩の草の根運動の組織を作ろうではないかということで、そういう志のあった人と一緒になって、日本消費者連盟創立委員会というのを立ち上げたわけです。これが一九六九年です。

当時、いろんな公害問題が起こって世間の注目を浴びていた時代でありましたから、そ

して先ほどの牛乳の値上げ反対運動なんかで、今までのすぶの素人の奥さんたちが実績を勝ち得たというので、ちょうどタイミングがよかったと思います。幸いにも、運動がスタートすることができました。

そこで考えたことはですね、労働組合のように企業や役所にお願いに行きますというようなことはやめましょう、と。我々は主権者なのだから、役所も業者も企業も、我々主権者からするなれば配下にあるべき——配下というと御幣がありますけれども——松下幸之助さんが言った「消費者は神様です」、神様ではないけれども日本国家の主権者であることは間違いないのだから、そういう位置づけをはっきりさせて、その主権者らしい振る舞いによって我々の権利を実現しようという、そういう考えで運動を始めたというわけです。

それで、その方法としましてはですね、第一番に、消費者運動というのは実は一人一人の消費者の意識を変える運動ではないか、と、私らはそういうふうに位置づけました。消費者の意識がすべてを決定するんだ、と。この商品を買うか買わないか、それは消費者の意識によって選択が行われるはずだ、というわけで、だから消費者運動は消費者の意識を変える運動だ、と、そういう位置づけを致しました。ということになると、消費者の意識を変えるための一番必要なことは、消費者に的確な情報を与えることではないか、ということで、私たちの運動のメインの柱に、情報提供をする、私どもは消費者リポートという

ものを発行して、それによって消費者の意識を変えていきましょうということです。これは今でも続いておりますけれども、十日に一回やるものです。だいたい普通は消費者団体が出すものは月一回が多いのですけれども、私どもは敢えて十日に一回、月三回やろう、と。これは大変な仕事になるのですけれども、これを今でもこれは続けられております。もう創刊以来一千百号を越えておりますですね。幸い続いております。

運動のやり方というのはですね、これは私どもが初めて編み出したもので、公開質問状方式というやつですね。これは、企業がいろいろ良からぬ商品を出したり嘘の広告を出したり、そういうことで消費者を騙して商品を売っておることに対して、その事実を公開質問状という形で突きつけて、その回答をとって、納得がいかなければ、場合によっては刑事告発をするとか、新聞に発表するとか、そういうようなことをやったり、国会で質問をしてもらって追及してもらうとか、そういうようなことをやりました。

そこで、その情報公開の一環として、こういう行動を起こした場合は必ず記者クラブへ行って発表をする、ということをやりました。当初は記者クラブへ行きますと、おまえたちは総会屋ではないのか、そういうことをやって新聞の記事にして金をゆするためにやっているのではないか、と、えらく勘ぐられました。

最初は相手にもしてくれなかったわけですけれども。

やってから、そうですね、約一年ほど経ってからようやく世間に認知されるようになりました。その第一番目はＮＨＫのテレビの「経済読本」です。これは先ほど経済企画庁のところでお話ししたい伊藤光晴教授がですね、司会者のようなことをやっていた、消費者向けの番組ですけれども、そこで「幻の主権」という主題で私を出してくれて、それまでの活動の紹介をやらせてくれました。こういうことで、ようやく私たちの運動が市民権を得るというようなことになったのですが。

それと前後してですね、私のところで最初に大きな仕事として成果を上げたのは、東京の牛込でですね、当時の鉛が入ったハイオクタン・ガソリンの、鉛公害の報道があります。鉛の排気ガスを吸って体を悪くしたという事件がありましたけれども、あの時、大きな新聞種になったのですが、私どもはそれをつかまえて、石油業者と自動車業者との両方に、個別業者にですね、質問状を送りました。あの当時、ハイオクタン・ガソリンというのは、値段は高いかわりにノッキングを起こさない、坂道も平気で上がりますという、そういう触れ込みで売っておって、それと引き替えに鉛の公害をばら撒いていたわけですけれども。

とにかく、ハイオクタン・ガソリンを使わないと坂道を上がらないのかどうか、ノッキングを起こすのか起こさないのか、という質問状を個別の自動車メーカーと石油業者個別に出したわけです。戻ってきた返事は、もう、まるっきり反対なのですね。石油業者のほ

うは、鉛を入れたハイオクタン・ガソリンでないとノッキングを起こします、ところが自動車メーカーはそろって、我々の作った自動車は、そういうことを起こさないようにエンジンが作られております、普通のガソリンで結構です、と。

これは大変だ、というわけで、公正取引委員会と通産者なんかに、それから運輸省にも、質問状を出しました。これが新聞の大きなニュースになりましてですね、これは大騒ぎになって、各省が早速、会議を開きましてですね、役所で使う車にはハイオクタン・ガソリンは使わないでレギュラー・ガソリンに統一しましょう、と。地方自治体もそういう返事が来ました。その後、鉛をやめて他の物質でオクタン価の問題を処理するとか、いろいろやりました、ということです。

私どものやり方で一等はじめに大きな成果を上げたのは、こういうことですね。つまり普通ならば、自動車の業界へ一本で出す、あるいは石油の業界へ一本で出すと、どこかで適当にまとめて返事が一本化して戻ってくるわけですけれども、私どもは敢えて個別にやる。それ以後、一切、業界団体というのは使わないで、個別のメーカーに質問状を出すということを、ずっと続けて参っております。まあこれを運動の成果の一例として申し上げておきます。

で、まあ、こういうような運動の——約一年余りの運動の——成果をですね、新書本に

した『不良商品一覧表』というのが――これは三一書房から新書本で出したのが――これが馬鹿に、たった二箇月で十二万部売れましてですね、ベストセラーになったわけです。で、これはなぜ売れたかといいますと、それはでは、そういう企業のそういう悪いことをやっているというのは、新聞には一切、業者の名前は出ないし、それからもちろん本にも実名は出ない、という習慣だったのですが、この本が初めて、何社のこれこれの商品にこういう悪い点があるのだということを、全部ばらしたのを記事にして出したものですから、まあ、これは大変な騒ぎになりました。メーカーのなかには告訴をやろうということを考えたところもあったようですけれども、ま、こういうような、出版社の社長も――三一書房というのは、竹村一（はじめ）という社長は京都出身ですが、京都一中の同窓生みたいですが――そういう人が勇ましいことをやってくれたお蔭で、私たちの運動が世間に知られるようになったというわけです。

で、その直後にあったのが、英語の百科事典のブリタニカの告発。これも、大事件になりました。これは詐欺商法で、英語ばかりの事典――事典そのものは立派な事典なのですけれども――それを日本人に売りつけていたわけですね。というのは、この百科事典を五、六歳の赤ちゃんでも見ていると、知らないあいだに英語がペラペラ喋れるようになります、といって、寿司屋さんのところへ行ったり、そういう英語のわからない両親なりのところ

へ行って、売りつけて、ワンセット四二万円を二三万円にしますからと言って――これは詐欺商法ですから――売りつけて、で、こんなのは騙されたから支払わないと言うと、裁判所へ訴えてですね、差し押さえをして身ぐるみ剝ぎ取るというような、悪質な商法があったわけですけれども、我々は、ここのセールスマンの人からのタレ込みがありまして、自分はこういう悪い会社はもう辞めるのだけれども、ネタを一切提供するから是非やっつけてくれ、ということを言ってきたものですから、私らの事務局の若い者をセールスマンの講習会へ潜り込ませて、ぜんぶ録音して録ってきて、証拠を固めたうえで、弁護士さんとも相談をして、詐欺罪で刑事告発を致しました。これは結果において、検察庁は不起訴ということに――わからないと言うのですね、加害者も数が多いしわからないし、被害者も数が多いから、ここはもうしょうがないからというので――不起訴にはなりましたけれども、これが新聞種になった結果、被害者の会ができて、このブリタニカ社は申し出に対して、その本代にプラス一〇パーセントの慰謝料を添えて二千数百名の人にお金を返しました。そのお蔭でこの会社は撤退を致しましたけれども。

こういうことが動機になって――割賦販売法という法律があったのですけれども――こういう詐欺商法を根絶するためにというので学者が相談して、割賦販売法の改正というのが国会で成立をし、あわせて訪問販売法という法律をつくるということも実現をしたわけ

です。

こういうように、企業が良からぬことをやっている場合は、その社員のなかの良心的な分子がですね、内部告発をやって、社会に訴えて、そしてこういう不正を無くするというようなこと、これが消費者運動の真髄である、ということを先ほど申したラルフ・ネーダーが言っておるわけです。内部告発の倫理性ということで、企業への忠誠りも市民への忠誠を優先すべきだということをですね、言いました。私どもはこれを実行して成功したという例でございます。こういうようなことをいろいろやり、あとは時間がないので省略致しますけれども。

こういうことをやりますと、企業からの抵抗も無いといえば嘘になります。事実、脅迫電話、これはわりあい数が少ないわけですけれども我が家へ電話が掛ってきたこともございます、連盟を潰してやるから覚悟しろ、と、家の者に脅迫電話を掛けてきたということもございます。それから、ある時はですね、これは日本の一流のメーカー——医薬品だとか化粧品だとか合成洗剤だとか、我々がよくやりだまに上げた商品を出している会社ですが——これらが一緒になって、私を告発するという動きがございました。これは途中までどうも行ったようですね。とにかく、ある新聞社の記者が私のところに来て、あなたは二、三日中に逮捕されるよ、と言う。警視庁クラブからそういう知らせがあるから、おまえの

顔写真を今のうちに撮っておくんだ、と、やって来ます。私はまさかと思っておりましたけれども、後で聞きますと、事実そういう動きがあったようですけれども、どうも上のほうが押さえたようですね。消費者連盟というのはそんないい加減なことをする団体ではないから、といって、よしとけ、というようなことで、私は逮捕を免れましたけれども、すんでのところでやられるところ、ということもございました。

しかし一方でですよ、業界のなかにもわりあい良心的な人は、私どもの運動を評価してくれた、という事実もございます。例えば岡崎嘉平太という人がいましたですね。あの人は全日空の社長で、日中経済協会常任顧問ですが、私どもの運動を評価して、あの人の書いた本にも、わずかの頁ですけれども載っておりますし、それから経団連の花村仁八郎という——あれは事務局長をやっていたのですかね——ある日、突然、私どもの事務所へやって来ましてですね、ああ、これで安心した、と言う。何が安心したのか、と言うと、おたくの事務所のソファは穴が開いておるし、粗末な事務所で安心した、と。どうも業界からの噂によると、業界をああいうふうにやっつけては業界から銭を巻き上げて、うまいことをしているんじゃないか、という噂があります、それで自分は確かめに参りました、と言うのですね。それで、なるほど粗末な事務所に穴の開いたソファが置いてあるし、竹内さんも粗末な洋服を着ているから安心しました、頑張ってください、と言って激励して帰

って行きましたけれども、まあ、そういうように世間では、とにかく自分たちにとって不利益なことをやるものだから憎くてしょうがなかったことは事実のようです。まあ、そういうこともあったということだけを申し上げておきますが。

ここで日本消費者連盟について一言申し添えます。この組織は、いわゆるピラミッド方式では無くて独立した自発的な市民の集団です。従って、本部とか支部とかいうものは作りません。地域グループを作ってもらっています。現在、加入者は五千人くらいです。多いときは一万二千人くらいいましたけれど減ってきました。運営委員が複数おりまして会員の選挙で選びます。そのなかから互選で代表者を選ぶ、そういう組織です。私は引退したから現在はタッチしていません。

それからお金の方ですけれども、これはさっき申しました消費者リポート、これは機関誌の役割ですけれども、一年七千円という購読料を頂いてそれでまかないます。そのほかにパンフレットを出したりします。事務所は本部と言わず事務局と言い、そこに職員が十人くらいいます。家賃は二五万円くらい払っています。まとまった出費というのはそんなものです。

そこで——時間がだんだん迫って参りましたけれども——私どもがずいぶん数多くの運動をやって参りましたけれども、この運動のなかで非常に——徐々にではありますけれど

も――消費者の意識がずいぶん変わってきたし、それからマスコミの姿勢も変わってきた、もちろん企業の姿勢も変わってきた。行政の姿勢はいちばん変わらないほうだと思います。

例えばマスコミの姿勢ですね、これは先ほども申し上げましたけれども、企業の名前を挙げて記事を書くということは、昔はもう絶対のタブーであったわけですね。ところが、このごろは平気で企業の名前を出しております。それから、役所の良からぬ事を書くというのもタブーでありましたけれども、これは、高級官僚がどうしたこうした、というのが平気で記事になります。それから、議員のこともですね、このごろは政党のボスの事も記事になるようになりました。これは、私たちが運動を始めた頃は絶対にタブーであったわけですね。だから、

私が始めてから三十年余り経ちますけれども――三十年といえは長いようで短いようで――その三十年前と現在とを比べると、ずいぶん、そういう面では様変わりをしているなという印象は、これは否めないと思うのです。ですから、消費者運動なんてのは幾らやったってあんまり成果が上がらないんじゃないか、といって悲観的なことを言う方がいらっしゃいますけれども、私は、長期的な目で見ればけっしてそうではない、消費者の意識は、徐々にではあるけれども変わっているし、そういうことが今のマスコミ業界や民間企業のほうや、あるいは役所のなかにも若い人のあいだには、だいぶん意識の変わっている人が

出てきた、と、私は楽観的に見ておるわけです。

以上で、私どものこれまでやってきたことのあらましをアトランダムに申し上げましたけれども、残された時間で、私がぜひ訴えたいことの一、二を申し上げたい。

食糧問題

それは食糧問題です。現在、日本ではですね、食糧問題というのはほとんど真剣に議論されませんですね。マスコミにときどきチラッチラッと出ますけれども、私どもからすれば、核心をつかんだことを一つも言われていない。それから農林水産省も毎年、白書というものを出しますけれども、何だかわけのわからない内容のものしか出さないし、国会のなかでも食糧問題についてほとんど議論が行われていません。現在は牛のことで大騒ぎをしておるようですけれども、ああいう、まあ、単発的なことしか議論されない。

そこで私は、今の日本で一番——私からすれば——食糧問題ではないのか、と思う。これは、農林省にいた者だから手前味噌だろうと仰るかもしれませんけれども、これから申し上げる事実によって皆様はどう判断なさるか、ですけれども。私は実は、食糧問題というのは地球規模でこれからいちばん深刻な問題になるのではないかと思っている事柄なのです。

まず食糧問題というのはですね、今なんにも問題ないのではないかと、特に日本の方々はそう思っているのではないかと思います。好きなものはとにかく金さえ出せば自由に手に入る、それはまあ事実です。ところが、世界をマクロに見た場合にどういう状況になっているか、ということになる。そのなかでも日本はどうなるかとなると、非常に寒気のするような実態が浮かび上がってくるわけです。

まずですね、世界全体の需給の問題から簡単にお話ししますとですね、まず世界の人口――このごろ南北問題とよくいわれますね、北の先進国と南の開発途上国、こういうふうに大雑把に二つに分けて議論しますと、人口割りではですね、これは、豊かな北というのは人口では四分の一ですね、で、貧しい南の人口は四分の三です。ところが、食糧のなかで穀物というものを代表させて言いますと、世界の穀物の消費の割合といいますと、北が半分、南が半分ということなのです。じゃあ北の我々がそんなに御飯やパンを腹いっぱい食っているのか、と皆さんはお思いになるでしょう。実は、食べているのです。それは、形を変えて食べている。というのは、北の食べている穀物――世界の消費の半分――そのうちの非常に多くの部分が、家畜に消費されているのですね。ぜんぶ人間が食っているのではない。人間の食べられる穀物を、北の豊かな人たちは家畜に食わせている。牛や豚や鶏に食わせて、そして肉をつくって、そして我々は食べているということ。その結果、今

のような少数の口数の人間が世界の穀物の半分を消費しているということ。この事実を知っている人は非常に少ないです。日本の政治家でも経済学者もあんまり言わないですね。皆様ご存じないのだろうと思うのです。このことが南北問題の核心であるわけです。今、アフリカや南の人たちで飢餓状態であるということは、ときどき皆さんご存じだと思うのですけれども、穀物の消費量の割合からいうと、こういう実態が厳然として存在している。それは、北の豊かな人の食生活と南の貧しい人の食生活とに根本的な違いがあるということ、この事実を我々一人一人がきちっと認識するならば、もっともっと真剣に食糧問題に関心をもってくれるはずだ、と私は思っておるものですから、これを今、冒頭に申し上げたわけです。

そしてこの南北問題というのが――現在は宗教の対立のような格好で世界の紛争が行われておりますが――食糧問題に必ず火がつく日が来るのではないか。これが来た時には、これはもう大変な問題になるはずです。そのことを我々は予想して対策を練らないかぎり――特に人口一億二千万のこの日本人――これは本当に、どうなるかわからないという状態です。

そこで、私たちはよく聞かされましたですね。経済が進歩して工業化が進んだ国は、農業なんていうものは二の次、三の次にするのではないか、と。日本の多くの有識者もそう

思っているのだろうと思います。だから農業問題や食糧問題にはほとんど関心を示さないのではないかな、と思うのですけれども、これは、工業が進んだ国は食糧問題は二の次にしておる、という我々の考えは、それは間違いであるということが、事実で示されております。

例えばですね、穀物の自給率で比較してみます。日本は先進国の一員ですが、穀物の自給率は――これは一九九九年の実績ですが――二三パーセントです。これをまず頭に置いて頂きます。二三パーセント、これを低いとお思いになるのか当たり前とお思いになるかは、あとの問題。そこでまず経済先進国から申し上げます。イギリスが一〇〇パーセント。あの島国であんまり物が出来そうにないと思われるのに一〇〇パーセントですよ、自給しております。イギリスは実は、あの、このまえの世界大戦が終わった時点では、自給率が三〇パーセントまで落ちたのですね。あれはドイツにやられて大変なことだった、それを大変な努力をして現在一〇〇パーセントにした。イタリアは八六パーセント、まあまあですね。ドイツは敗戦国であるわけですけれども一二三パーセント、すごいですよ、これは右肩上がりに自給率を上げております。フランスは一九四パーセント、これはもとからヨーロッパの農業大国です。我々はフランスといえば華のパリとしか思いませんけれども、実はフランスはヨーロッパ全体を養う穀倉としての役割をしておる。だから、パリから少

し離れて旅行すれば一面の畑ですね、あれは農業大国です。アメリカは一三四パーセント、まあこれは世界一の穀物の輸出国ですが、一三四パーセント。カナダは一六三パーセント。G7とか何とかいわれる国々の多くに比べて、日本は二三パーセント。非常に恐ろしい状態ですね。

そこでもう一つの観点から見てみます。人口が一億以上あるような国の穀物の自給率はどうか。まず人口の多いといえばアジアですね。インド、これはどうもそんな自給はできないではないかと我々は思うのですけれども、実は一〇九パーセントです。ここにも問題があるのです。けれども、今のところは数字的には一〇九。インドネシア、これも人口は多いですね、これが八六パーセント。七、八年前は九四でした。これが下がってきた。これはちょっと黄色信号が点きそうですね。中国は一〇一パーセント。これは人口一二億ですか、これは一〇一といいますけれども、これもちょいと調子が狂うと、図体が大きいですからこれは大変です。穀物が不足だっちゅうんで世界から掻き集めれば、世界中の食糧バランスを崩してしまう。大変なこれは火種ですね。現在は一〇一ですけれども、いったん何かの都合で悪くなりゃあ大変な問題になります。

というようなわけで、穀物の自給率に代表させて食糧問題のポジションを見た場合に、いかに日本が恐ろしい状態にあるかということが、おわかりだろうと思うのですね。こう

いうことを知っている日本人はほとんどいない。これまた恐ろしいことです。農林水産省はこういうことを訴えようともしません。

それで、日本の個別のその食料品の自給率を申し上げますと、小麦が九パーセントですね、ひと桁です。大豆が三パーセント、健康にいいとこのごろ盛んにいわれている大豆の自給率はたったの三パーセントです。野菜が八四パーセント、野菜くらい自給できていそうだとお思いになるが、最近急激に、値段が安いというのでもって、中国や南米あたりからもうずいぶん野菜が入る。果物がついに五割をわりまして四九パーセント。それから肉類が五五パーセント、牛乳・乳製品が七一パーセント。そして水産王国とかつていわれた日本のお魚、魚介類が六六パーセントです。これは急激に自給率が落ちております。まもなく五割をわるんじゃないか、と。こういうようなことを目の前にしますとですね、居ても立ってもいられないような気持ちになるのは私だけでしょうか、と、こう言いたくなるわけですね。

こういう状態でありながら、これを悲観する農林水産省の態度はどうかと申しますと、とにかく消費者が、お肉が好きだ、外国の野菜が好きだ、お魚は嫌いだ、御飯は嫌いだ、パンだ、と言うものだから、消費者のニードに合わせるように供給を間に合わせるのが日本の農林水産省の役目だ、と、こう言っているわけです。毎年の農業白書を御覧になれば、

そうとしか書いてない。だから、日本の食糧の事情はこういうような危険信号を発しているのだというようなことを一切言わないですね。今度の狂牛病と同じです。そういうことを言うとみんなが混乱するから、不安がらせないでおきましょうと、この役所の考えは根本的に間違っております。ですから日本の消費者は、食糧というのはもう金さえ出せば自由自在に空気と同じように手に入ると思い込んで、めちゃくちゃ好き勝手にものを食って、そして血圧を高くしたり、癌になったり、いろんな成人病に苦しんで、医療費に三〇兆円も金をかける。こういう馬鹿なことをやっているのが日本の現状だということを、我々は認識しないといけないのではないかな、とまあ思うわけです。

ちなみに、アメリカの農業問題・食糧問題の専門家であるレスター・ブラウンという人はですね、二十一世紀は飢餓の世紀だ、二十一世紀は地球人は飢えますよ、ということを予告しております。これは科学的な根拠に基づいて、飢えますよ、ということを予告しているのです。こういうことをアメリカの政府も無視してやっているわけですね。

地球の掟を守ること

そこで、なぜ日本の国はこんなおかしくなってきたのか、とまあ申し上げたいわけですけれども、これにはですね、アメリカの占領政策が非常に大きな役割を演じておるわけで

す。アメリカは――我々は工業国だと思っておりますけれども――実はあれは世界一の農業大国なのですね。輸出品の筆頭は農産物なのですね。工業製品よりも農産物のほうがその割合は高い。だから世界規模で見ると、アメリカは農業大国だという位置づけをしなくちゃいけないのではないか。ですからアメリカは、この戦争終了直後から、アメリカの過剰農産物をいかに世界中に売りさばくか、ということを戦略目標としてやってきております。

その第一ターゲットになったのが、敗戦国日本です。マッカーサー司令部がやった使命の一番目に位置するのが、この食糧問題ですね。まず、戦後まっさきに学校給食に脱脂粉乳ととうもろこしなんかを子どもに与えた。あれはですね、アメリカの過剰な農産物を一億二千万の日本人の胃袋に押し込むための、戦略の第一歩であると位置づけなくてはいけない。その後、フライパン運動とか何とかいって、脂っこい肉類を食べましょうという運動を、アメリカの餌業者の団体が日本にお金を出してキッチンカーを走らせて、食事の改革の宣伝活動をやったという、これはもうご存じだろうと思うのですね。そういうようなことをして、日本の食生活の習慣をがらりと変えて、お肉を食べましょう、パンを食べましょう、ということに変えていこうという戦略を遂行した、それが事実成功した。その大口の人口をもっている国の成功の第一例が日本国なのです。それは占領政策を通じて実現

をした、とまあ、いうわけですね。

そういうことで日本は第一番目の――犠牲者といっちゃあ言い過ぎかもしれませんけれども――やられた、アメリカの世界戦略の標的になってきた。で、アメリカが今つぎに狙っているのは中国です。人口一二億の中国に狙いを定めております。そして中国に対しては、あれですね、豚肉をもっとよけい食わせようという戦略を展開しておる。まず学校給食にパンを食わす。北京に大きなあの学校給食のパン工場を寄付したりして、子どものうちからパン食になつかせる。そして大きくは肉ですね。脂身の少ない肉を普及させようというわけで、アメリカの配合飼料をですね、工場を作って配合飼料で、アメリカから種豚を持ってきて、豚肉を大増産して売り込もう、というわけです。つまり、肉食を増やし、その餌になる穀物を輸出するというわけです。中国ばかりではないですよ。東南アジアのタイにしろ、あれ、みんなそうです。それから今、目をつけているのは、お金を持っている石油産国、アラブの地方。あそこに、お肉を食べましょうという大宣伝をやって、穀物のはけ口をつくろうとしている。つまり、胃袋を改造していこうというわけです。これは、日本で成功したので味をしめて、全世界をこの手でやっていこうということで、今その戦略を遂行中です。

アメリカの政界に絶大な権力を持っているグレイン・メジャーですね。そういう人たち

がアメリカの政界を動かして、こういう世界戦略を展開しているという事実を、我々は知る必要がある。先ほどちょっと申しかけましたけれども、インドの穀物自給率は一〇九と申しましたけれども、インドでは、緑の革命といいまして、新しい品種で増産効果の高いもの、それは農薬を使い化学肥料を使い、それから大型の農機具を使ってできるような農業を、いま普及、ずっとしてきているわけですね。ま、その結果の増産もあるので、私は、これはヤバイんじゃないかなと思っております。そのために、インドの地下水が水位が下がってきておる。どんどん地下水を機械が上げるものですから。だから、そのうち略奪農業で——インドというのは膨大な人口を持っておりますけれども——ある時期が来たら、食糧不足という事態になりかねない。中国も同じです。こういう人口の大きな国がいずれも、そういうヤバイなあという要因を抱えておって、今、進行中です。今のところ静かであるけれども、いつこれが爆発するかわからない。だからレスター・ブラウンが「二十一世紀は飢餓の世紀だ」と言うのは、私は、荒唐無稽な話ではないだろう、とまあ、思っておるわけです。

日本の状態に戻りますけれども、戦後の日本がアメリカの占領政策によってまんまとしてやられた、ということなのですけれども、現在においてもその状態が、それに気がついてですよ、何とか巻き返そうという、そういう反発力というのは全く見られませんです。

私の言ったことが嘘だとお思いになるならば、本屋に並んでおる農業白書を御覧になればわかります。何にも書いてない。そして日本の農業は、耕地面積は減っている。何よりも問題なのは、農業労働力というものが、量的にも減っているばかりでなくて、高齢者中心になっておる。今、平均年齢は六十歳代ではないでしょうかね。もう、じいちゃんばあちゃんしか農業の担い手がいなくなっている。もう、四十歳代は非常に少数派になってきています。こうなると、あと放っておいても十年経てば、たんぼは草が生えてしまうということです。働き手がいない。そして若手の一部が、大規模で農業機械をと言って何百万もするような農業機械を買って、採算が合わずに倒産して首吊りをする、というような人も出てきておる。だから日本の農業は、放っておけば自滅するということです。やり手がいなくなる。これは農業ばかりではありませんね。林業もそうです、もう高齢者ばっかり。それから水産業も同じです。ですから、我々の生命を支える食べ物を作るこの営み、おしなべて、もう捨て子のようになっておる。

それに対して日本の政治は何らの関心を示していない。このごろ小泉内閣が雇用・雇用と言いますですね。雇用政策と言う。雇用政策で何を考えているかというと、都市部の三次産業のなにかサービス産業の人を増やす、そんなことしか考えない。知恵がないですね。一方、農林・漁業のほうには労働不足が厳然としているにもかかわらず、それに対する危

機感が全く見られないし、今の失業者が多いという、事実、私らのしっておるように、サラリーマンを辞めて農業をやる人がかなりおります。それから、学生運動で失敗をして若いうちから農業をやっている人もいますけれども、そういう人はいるけれども、ごく一部分であって、大半の人は、農業なんてものは儲からないしキツいばかりで駄目だ、と言って見向きもしない。

また政府も役所も、そういう、本気でもって日本の食糧を自前で増やそうというような意欲が全く見られない。そして何かというと、消費者が悪いのだ、消費者が肉を欲しいというから輸入肉を自由化して入れるしかないのだ、と、そういうふうな言い方です。もう、投げやりです。もう、このままではおそらく、世界のなかで真っ先にアウトになるのは日本じゃないだろうかと思うのは、今までお話ししたあの数字からすれば当然です。そういう危機状態にあるということを、日本の政界や行政の人やあるいは経済関係の人が一切指摘しないというのはどういうわけでしょうか、と思います。だからこれは、真っ先に消費者自身がこれに気がついて、毎日の食生活の営みで自発的に、変えていくしかないのではないか、というのが私の現在の心境です。

我々の食生活というのは、三度の食事の献立、これは我々の自由意思で自由にできることです。だから我々の意識が高まれば、これはもう明日からでも出来ることなのです。役

所のお世話になる必要は全くない、と、極端にいえばそうなのです。で、一方ですね、今度は健康状態が悪くなっているというのは御承知の通りですけれども、その原因は何かというと、食生活のゆがみなのですね。肉の摂り過ぎ、野菜を食べない、というようなこと。これはですね、もうはっきりしているのですね。女性の乳がんは、イギリスの御婦人は日本の乳がんの十倍もの高い率で罹っているのです。イギリスは野菜をあまり食べない国、お肉が主体。事実、そう病気の統計からもはっきり出ている。そういうようなわけで、我々は今、健康問題に一番、関心を持っているのです。そして年間三〇兆円ぐらいの直接の医療費を払っておりますね。莫大な出費なのですね。そして病気の不安に恐れおののいているということなのですけれども、そういった病気のほとんどが、この生活習慣病、そのなかの大きな部分が食生活なのですね。そういうことは最近ようやく、医学畑の人がいろんな研究をして発表して、テレビなんかでもPRをして、ようやく一部の人がわかり始めてきたけれども、大半の人は、子どもがお肉しか食べないから、食べてもらうためにお肉ばっかりの料理をする、というようなことで投げやりになっている。

こういうことでは、もう明日が見えている、という。じゃあよその先進国はどうか。イギリスというのは、先ほども言いましたように、驚異的な増産努力をしてきた。これは戦後の政府の努力の結果であるわけで、あわしてイギリスの農地の保護ですね、環境保護、

これはまあ非常に厳しいですね。あの、農家の垣根を勝手に壊してコンクリートにするみたいなことも禁止したりですね、ものすごいです。それからドイツなんかも、チョコレートの箱の絵にあるように、本当に徹底して、農村といえば、農村地帯には余計な家を建てさせないとか、工場も作らせないとか、もう徹底しておりますし、フランスも、あれは農業大国と先ほど申しましたけれども、食糧問題に一番力を入れているのはフランスです。

アメリカだけは、例外ですね。あれは先ほども言いましたように、商売の手段として農業が位置づけられておる。だから、アメリカの大規模農業の担い手というのは大手企業ですね。いわゆる本来の農民というのはもう隅っこに追いやられてしまっておる。そして大手の企業ですから、採算本位でやるから、もう収奪農業です。もう地下水を滅茶苦茶に吸い上げて穀物を作って、そこが駄目になるともうそれを捨てて、また別のところで同じようなことをやる。だから今、広大なアメリカの農地は、もう日に日に荒廃をしておりまして、おそらく近い将来にあそこは砂漠化するに違いない。そうなると、我々が一番恩恵を受けているのはアメリカからの食糧なんですね。日本人が食べている卵にしろ肉にしろ、それの餌はみんなほとんどアメリカから持ってきている穀物でもって養われておる。だから日本の食生活というのはアメリカに大きくおんぶしている、その本家本元のアメリカの生産事情がもう先が見えてきている。もうこうなると、日本人が飢えるのはもう先が見え

ているということです。遠い将来のことではありません。あと十年以内に必ず、これは表に出てくると私は思います。

だからそういうことは、今の日本にとって一番大切なのは、緊急に手当てしなくちゃならないのは、食糧問題、食糧を自給するための環境整備の問題ではないか。農地を遊ばせておる、なぜ遊ばせておくか、日本人が御飯を食べなくなってパンばかり食べるようになったから、たんぼでお米を作ると余るから減反だ、という。あんなのはですね、今、小泉総理大臣が人気があるのだから、これから我々は三度、御飯を食べましょうということを、なぜ一言、ラジオで言わないのか——あるいはテレビでですね。そして今のようなことを小泉総理の口から言えばですよ、国民の多くの人は、なるほどそれは大変だ、と、今までは何でもいいからと思って食べていたけれども、そういう大事な問題があるならば、ちょいとばかり御飯を炊くのは面倒くさいけれども、三度、御飯にしましょう、と。そうすれば日本の減反問題というのは一挙にして解決してしまう。これは一人一人の消費者の努力で必ずできるはずなのです。お役所のお世話になる必要はない。そして、アメリカから文句を言われる筋合いでもない。

政府がアメリカの農産物は拒否すると言うと国際問題化するのだけれども、消費者が自発的にパンをやめて御飯を食べることにしましたと言えば、政府は何ら責任を負わない。

消費者一人一人に文句を言ってください、と言っておれば問題ではないだろうか、と、まあ、そういうように思うわけです。

まあこの問題は、論ずれば二時間でも三時間でもかかるのですけれども、もう時間がとっくに過ぎたようなので、このへんで終わりにさせて頂きたいのですけれども、

私どもはですね、今まで、生活するうえで何を追求してきたか。これまでの戦後の経過を見ますとですね、便利さを追求し、それから快適さ、それからまあ格好よさというのですかね、こういうものを追求して、努力をして今日に至ったわけですけれども、私どもは、その追求している目的・目標が少しこれ間違っていたのではないか、という自覚が必要なのではないでしょうかと思うのです。便利さ・快適さ・格好よさ、こういうものの追求というのは、なるほど悪くはないけれども、それを地球全体のトータルとして考えた場合に、地球の掟に反していることをいっぱいやっているのではないか、ということに気がつく必要があるのではないだろうか、と思うわけです。地球の掟を忠実に守るというのは、私の今日のお話の最後のキャッチフレーズにしたいのです。地球の掟とは何だ、皆さん地球に掟なんかあるのか、地球を征服するのが文明だ、なんて言われたわけなのですけれども、私は私はあの文明論というのはおおきに間違っていると思うのです。地球を征服する、とんでもない。地球というのは一つの生態系であって、この秩序を乱せば、地球全体を、こ

れはもう滅ぼしてしまうことになる。その元凶に我々人類がなっていいのでしょうか、という。これは食糧問題にしろ、エネルギー問題にしろ、あらゆる生活の問題についてあてはまる問題だと、思うのです。

最近の世論調査を見ますと、何でもその、経済がよくなることを願うのを第一番目に挙げられる消費者の方が多いのですけれども、私は、経済成長というのは何か格好いいように思われるけれども、その中身を見ると、いったい何をやっているのだ、経済成長というのは。何も自然を破壊し、それがなぜ経済成長なのでしょうか、という問題がある。私は経済学者の人と議論をしたいのですけれども、経済は成長すべきものなのか、経済が無限に成長したらどうなるのか、また、できるのかということです。地球は有限です。経済の成長が無限であっていいはずはないのではないですか、と。

だから私は、世論調査の、一番政治でやってほしいのは経済の成長だ、と、私はそれは間違った意見ではないかな、と私は思っておるわけです。そしてもう一つ、労働問題で今、八方ふさがりのような気持ちになっておるけれども、一番我々にとって必要な食べ物を作る、農業や林業や水産業や、あるいは環境を守る——これは林業もそうですが——そういったものを優先するという考えに立てば、労働問題も、ものは考えようです。解決つくのではないか。そこで消費者が一番覚悟しなくちゃならないのは、物の値段は安いほうがい

い、と、それだけを唯一の物差しにして価値判断をすれば、大きな間違いをします。例えば食糧問題も、輸入のおネギのほうが安いからそのほうがいい、と消費者は考えて輸入のネギばかり買っていると、日本の農業は滅んでしまう。少々お値段が高くても、安全で美味しい国産のものを我々が愛用すればですよ、そのために、今までに払っておる何十兆円もの、病気をしたことによる無駄な出費、医療費をですね、節約できれば、私は、そして健康に過ごすことができるならば、お釣りが来るのではないでしょうか、と、そういうことを消費者に訴えたいと、まあ思っておるわけです。

たいへん時間を超過して申し訳ないです。これで終わらせて頂きます。

（01・12・16ご死去）

㊟ 本人逝去のため、村尾清一氏（昭17・9文丙）に校正をお願いしました。

（「演題問合せ」に対する故竹内直一氏からの返信）私がお話したいことは、私自身の人間形成において、京都の風土、小・中・高時代の教師や友人との触れ合いがどのような影響を与えたか、その上での自身の職業選択、それぞれの職場でみたこと、それから得た教訓、そしてその結果得た政治、経済、社会の現象に対する考え方などです。限られた時間で欲張っていますが、できるだけ要領よく述べてみたいと思います。そして現在の諸問題打開のわずかなヒントにでもなれば幸いです。題名は追ってご相談します。〈01・7・8〉